地域の底力

石川県金沢市

伝統と革新の新たな調和を求めて

北陸新幹線開通により、がぜん注目を集める石川県金沢市。加賀百万石が育んだ、ぶれることのない金沢の人の心は、現状に満足することを知らず、未来へと前進し続けている。

金沢駅東口を彩る木組みの「鼓門」。奥のガラスドームとともに、伝統と現代の調和を演出している。2011年には米国の旅行雑誌で、「世界で最も美しい駅」のひとつに選ばれた。（写真提供：金沢市）

取材・文 山内史子
写真 KANOCO

新幹線のにぎわいにも揺らがない金沢の心

二〇一五年三月十四日、北陸新幹線開通。金沢～東京間は、これまで乗り換えを含めて約四時間要していたが、大幅な短縮を得て約二時間三〇分となった。

開通時のにぎわいの様子はメディアでも大きく取り上げられたが、実際、四月上旬に訪れた金沢市は国内外からの数多くの観光客であふれていた。兼六園や金沢城といった名所まで徒歩でたどり着ける程よい大きさの街は、散策を楽しみつつ巡れるのが魅力だ。

ただ、新幹線効果に万歳するような状況かと思いきや、お会いした地元の方々から聞こえてきたのは、意外にも戸惑いの反応。お客様に対してきちんとおもてなしができているか、との懸念だった。

前田家が築いた金沢城は度重なる火災で焼失したが、2001年に写真の「菱櫓（ひしやぐら）」などを復元。その作業には、伝統を継いだ地元の宮大工が力を発揮した。

その思いを代表するかのように語ってくれたのは、一六二五年創業の日本酒の蔵元「福光屋」の一三代目、福光松太郎氏。本業のみならず、金沢の活性化に長年にわたり尽力してきたひとりだ。

「新幹線開通は、五〇年来の悲願。多くの方にいらしていただくのはありがたいのですが、想定を上回る状況です。あたふたしない力量をもっているのか、多様な分野でさらなるグレードアップを実現できるのかが、われわれの課題でしょう」

金沢といえば、全国有数の観光地というイメージが強い。事実、新幹線開通前も年間約八〇〇万人の来訪者があったものの、交流人口の増加を明確に目指し、観光政策を立ち上げたのはわずか一〇年ほど前だとか。

「金沢を好きで来てくださる方を増やしたい、大型バスが大挙して来るような観光地にはしたくないというのが、大半のコンセンサスだったんです。今回も金沢のスタンスを崩さず、うまく対応していかなければなりません」

果たして、金沢のスタンスとはどういうものなのだろうか。

「行政も経済界も、金沢では文化の話しかしない。雇用やベアうんぬんではなく、たとえばお城をもう少し直したほうがいいなど、景観や伝統工芸に関しての話題ばかり。金沢の街のレベルをどうやって上げるか、それこそが一番、経済の発展につながると思っているからなんです」

その認識が、人口四六万人の市民に広く浸透しているのが金沢だと、福光氏は言う。

「前田家の殿様が代々なさってきたことを皆知っていて、そこをふまえた上で、では、今どうしようかと。そういう話が普通にできるのが、この街のおもしろいところ。伝統は最初からつくられない。必ず前衛から始まる。何も注入しないと、ただただ古ぼけていくだけ

「福光屋」社長の福光松太郎氏。蔵に隣接する直営店「SAKESHOP 福光屋 金沢店」には、「福正宗」「加賀鳶」「黒帯」などの銘酒のほか、直営店限定の銘柄もそろう。日本酒や酒肴に加え、みりんなどを使ったスイーツを味わえるカフェもある。

だ。金沢の人は、基本的にそう思っていますね」

その典型が、まさしく「福光屋」の経営だ。全量純米酒を仕込む「純米蔵宣言」を行ったのは、業界に先駆けての二〇〇一年。塩麹ブームをはじめ、ここ数年昔ながらの発酵技術に注目が集まっている中、発酵食品やその技術を活かした化粧品の開発も、早々から手がけてきた。

「市場、すなわちお客様が刻々と変わるから経営は新しい挑戦をしていかないと続かない。街も同じです。時々前衛が入らなければならない。その前衛を三〇〇年間取り入れ続け、現在の伝統になったのが前田家が残した文化です」

加賀百万石の伝統は、前衛から始まったという福光氏の話は非常に新鮮だった。

「古い建物のような表面的なものだけではなく、住む人の体にしみついた気質を感じられるのが、金沢の魅力なんだと思います」と話す「中むら」の女将、中村玲子氏。

江戸の頃からの趣が残る「ひがし茶屋街」。その景観を守るため、「金沢東山・ひがしの町並みと文化を守る会」では食べ歩きやゴミ捨ての禁止などのルールを設けた。新店舗の出店に関しては、協議会の了承が求められる。（写真提供：金沢市）

江戸の頃から継がれた茶屋街の文化が地域を活性化

一方、金沢の人の気質を語ってくれたのは、一八二〇年につくられた「ひがし茶屋街」に店を構えるお茶屋「中むら」の女将、中村玲子氏だ。

「金沢の人はぜいたく。精神的にも、物質的にもぜいたくをしたい、おいしいものも食べたい。とはいえ自分だけが楽しむのではなく、そのぜいたくを人にも与えたい、知ってもらいたい。そんな相手を思いやる気持ちが、ベースにありますね」

その思いの一端から始まったものの一つが、お座敷体験だ。観光客は低価格で、お茶屋遊びという一見さんお断りの憧れの世界を体験できる。

「おんぼらとしている」。心が広いという意味の方言も印象深い。

「なんとなく心温かい。そういう気質は新幹線が来ても、変わらない。それはとても大事なことだと思います。逆にお商売だけが目的でいらしても、たぶんこの街にはなじめません」

ひがし茶屋街をはじめ趣のある町家の多い東山は、今でこそ金沢の物産の店やそれを求める観光客でにぎわうが、一時期は、大規模店のある香林坊に人が流れたり、不況によりお茶屋遊びをする余裕のある人が減ったりと、危機的な状況だった。その建て直しのために発足したのが、地元の人々が自らの発案で立ち上げた『金沢老舗・文学・ロマンの町を考える会』と『金沢東山まちづくり協議会』だ。

「この二つの会がなければ、今のにぎわいはなかった」と中村氏が話す活動の一つが、一九八七年から始まった「金沢・浅の川園遊会」。近くを流れる浅野川に浮き舞台を設け、「滝の白糸」で知られる水芸をひがしの芸妓たちが演じた。

浅の川園遊会代表実行委員のひとり、カタニ産業株式会社会長の蚊谷八郎氏は、当時の様子を振り返る。カタニ産業は一八九九年から金箔製造業を営んでおり、蚊谷氏は石川県伝統産業振興協議会の会長も務める。

「単なる祭りでも金もうけでもなく、われわれの目的は、地域の活性化。すなわち街おこし、環境保全、芸事の保存、市民の連帯、経済の活性、この五つがテーマです。すべてが地域の人による手作りで、損得の勘定は考えていませんでした」

華やかな演目は年々評判を呼び、二〇万人近い来場者を数えたこともある。結果、多方面からビジネスチャンスとばかりに祭りへの参入を望む声が多数あったが、協議

右／カタニ産業会長の蚊谷八郎氏によれば、箸や盆などに金箔を貼る体験ができるクラフト・ツーリズムが人気を博しているという。左／町家を利用したカタニ産業本社を訪れた客人は、そこかしこで伝統的な職人技にふれることとなる。雪見障子を彩る、金箔を用いた細工もそのひとつ。

会では一切応じなかったそうだ。

「基本的な概念がぶれたら、めちゃくちゃになりますから」

二五年を経てひがし茶屋街周辺が活気を取り戻した今、園遊会の舞台を東山からみて浅野川の向かい、同じ茶屋街がある主計町（かずえまち）に移した。定着したイベントを変えることに戸惑う意見はあったが、地域の活性化を目的とする、当初の姿勢は変わらない。

「企業が発展するためには、地域が発展しなければいけません。損得はないと言いましたが、いわば自分の会社や業界をよくするためなんです」

生活の変化により、伝統工芸品の需要は減少傾向にあるが、ここ数年、金箔の需要は増えているとのこと。また、カタニ産業では伝統的な金箔の技術を生かし工業用の現代箔の開発も積極的に行ってきた。今やフランスをはじめ海外にも支社や工場をもつグローバル企業なのだが、金沢の本社は昔からの町家。伝統と革新が、自然と両立する景色だった。

金沢が目指してきたのは保存と開発の両立

福光氏や中村氏、蚊谷氏ら民間が金沢らしさを構築するなか、行政サイドで「金沢のレベルを上げる」ことに努力を重ねてきたのが、一九五四年に金沢市役所に入り、九〇年からは約二〇年間にわたり市長を務めるなど、金沢市政に五六年間の長きにわたりかかわった山出保氏だ。現在は石川県中小企業団体中央会会長として地元の振興に携わる。

「保存と開発。二律背反するテーマを共存させていこうという考えが常にありました。昔も今もある街が、金沢。伝統があるからこそ、新たな創意が生まれるんです」

日本各地、歴史を紡いできた地域は少なからず残るが、金沢にはほかとは異なる特徴がある。

「一五八三年に前田利家公が城を建ててから四〇〇年以上たちますが、その間、金沢に戦（いくさ）はなかった。戊辰戦争の影響もない。第二次世界大戦の空襲被害も含め、金沢は戦争の体験がないんです」

大きな自然災害も発生していない。すなわち、景観と共に伝統も気質も、流れが途絶えることなく継がれてきたのだ。「前田の殿様」の話を、これまでお会いした皆さまがごく普通に口にするのが、なんとなくわかったような気がした。

保存という点において、金沢城をはじめ歴史的建築物の維持・保存に欠かせない大工、表具、建具等をはじめとした職人を育成することを目的に、山出氏は一九九六年に「金沢職人大学校」を設立した。学校だが、月謝はとらない。また、山出氏が助役時代の一九八九年、市政百年を期して、加賀友禅や九谷焼といった伝統工芸を承継するため、「金沢卯辰山工芸工房」も設立された。興味深いのはともに月謝が不要なだけではなく、逆に研修費が支給されること。同様に、

長年にわたり金沢の街づくりに携わってきた山出保氏の活動は海外からも注目を集め、2010年にはフランスのレジオン・ドヌール勲章を受賞した。その独自の発想は著書『金沢の気骨』（北國新聞社）、『金沢を歩く』（岩波新書）に詳しく書かれている。

金沢市随一の繁華街香林坊を流れる鞍月用水は、江戸時代初期に改修の記録が残る歴史ある用水である。1995年から始められた開渠化事業は全長1500 m、付け替えた橋は93カ所に及んだ。（写真提供：金沢市）

「金沢職人大学校」（下）では伝統文化を支える新たな職人を育成してきた。左は「金沢職人大学校」の内部。ほかにも「金沢卯辰山工芸工房」「金沢美術工芸大学」と、伝統工芸の道を目指す次世代が学ぶための場が多く設けられているのも金沢の特徴だ。

1919年に建てられた紡績工場跡の倉庫を再利用した「金沢市民芸術村」もまた、山出氏の「保存と開発」の成果。365日24時間休みなく運営され、市民は手頃な料金で、演劇、音楽、美術の稽古ができる。

山出氏は市長時代に、茶屋街の芸妓たちが芸を磨くための習い事へも、補助金を支給したという。

「けしからんという意見や中傷はありませんでした。歴史的な背景が影響しているのでしょうね」

京都から美術工芸品の職人や、当時の裏千家の家元を招いた三代の前田利常公をはじめ、前田家が育んだ文化を守る精神が根づいているのだろう。

こうした山出氏の「保存と開発」を巡る取り組みは、二〇〇五年に完成した「金沢駅東口鼓門」をはじめ、枚挙にいとまがない。数々の斬新な試みの中では、暗渠化され駐車に使われていた用水の復活や、全国に先駆けて行った旧町名の復活も注目を浴びた。

「どちらも、ノスタルジーから始めたものではありません。かつて用水は、人々が洗濯等を行いながら会話をするといったコミュニケーションの場でした。都市景観の改善もありますが、そうした場を都市に再生したいというのが用水復活にかけた想いです。また、旧町名の復活については、富田主計という侍の屋敷があった主計町のように、町名にはそれぞれいわれがあります。自分たちの街の歴史にあらためて思いを馳せることで、コミュニティーの連帯感を強めたかったんです」

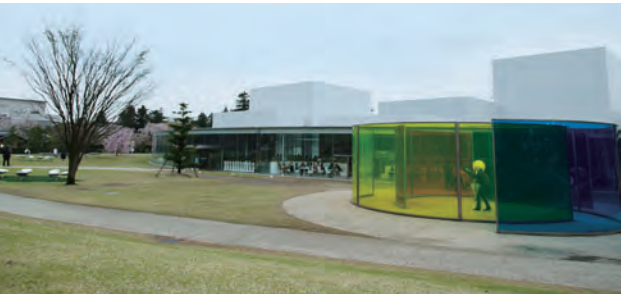
金沢では戦前に作られた福祉施設「善隣館」、戦後に生まれた独特の地域組織単位「校下」（小学校の学区に該当する地域）とそれを基本とする町会、そして町会毎に住民自らが一定の費用を出して設立・運営している「公民館」など、親密で共助の精神にあふれた独自のコミュニティーが見られる。現在、町内会への加入率は約七割。昔に比べて低くなったとはいえ、全国平均からすればまだまだ高い数字の背景には、コミュニティーの維持に向けた工夫と施策があったのだ。

金沢という街と人の魅力とはなにか

開発という点では、一九八八年に県・市で設立され、岩城宏之氏を初代常任指揮者に迎えた「オーケストラ・アンサンブル金沢」など、新たな文化の創造も多々なされた。中でも物議を醸したのは、二〇〇四年に完成した「金沢21世紀美術館」だ。

兼六園に隣接するエリアに現代アートの美術館をとのアイデアには反対が強かったものの、現在では、年間約一五〇万人の人が訪れるだけでなく、館の内外に赤ちゃん連れの家族姿も数多く見られる市民の憩いの場にもなっている。展示のみならず建物の設計そのものに関しても、国内外の評価は高い。

二〇〇七年から館長を務める秋元雄史氏は、金沢の人は実におもしろいと嬉しそうな表情を見せた。



「金沢21世紀美術館」館長の秋元雄史氏は「ベネッセアートサイド直島」の企画、運営を担い、二〇〇四年からは二年間にわたり「地中美術館」館長を務めた。上／色ガラスが渦巻き状のパビリオンを形成する「カラー・アクティヴィティ・ハウス」のように、「金沢21世紀美術館」の敷地内には無料で入場できるエリアにも作品が並ぶ。

レアンドロ・エルリッヒ「スイミング・プール」2004年

「全国から職人を集め、工芸の標本『百工比照』の作成も行った前田家は、現代でいうところのアーカイブやインキュベーションを当時から手がけていた」と、興味深げに語ったセンド代表の宮田人司氏。

「金沢市外から来た私には驚きでしたが、市民の皆さんが、芸術に関して厳しいんですよ。美術館を受け入れた今は、手を抜くな、レベルを落とすなというご意見なんですね。世界的な芸術というのをちゃんと金沢から発信しなさいと」

新幹線開通により金沢駅のホームや構内には伝統工芸品が飾られるようになったが、そのクオリティーや展示の術に関して一般市民が問い、新聞紙上をにぎわせたのも印象深かったと秋元氏は話す。

さらに好感を抱いているのは、金沢の人々の生活スタイルだ。

「季節ごとに行われる歳事が、まだ残っているんです。文化が日々の暮らしの中に織り込まれている。文化といっても偉そうなものではなく、習慣に近いものかもしれない。たとえば普通に皆さんお茶を習っているし、お茶席も多い」

二〇代、三〇代の若い世代でも、きちんと茶室を借りて日常的に茶会を開くという。

「特別なことをやっている認識はないでしょう。金沢は、本当におもしろい場所だと思います。そういう環境のなかでわれわれが立ち止まらないためには、今の街づくりや将来像と美術館を連動し、金沢というストーリーの中でどういう役割を果たすかを意識していかなければなりません」

生活に文化が根づいた金沢を楽しんでいるのは、株式会社センド代表の宮田人司（ひとし）氏もまた然り。宮田氏は二〇代で起業し、デザイン、映像やIT関連のコンテンツ制作など、東京から多岐にわたる発信を行ってきたが、二〇一〇年、縁あって拠点を移した。

「クリエーティブの世界において、日本は世界で比較しても非常にレベルが高いんです。中でもとりわけ、金沢はクリエーターが非常に多い。そして、街を歩けば、いろいろなところにアートがあるのにもひかれました」

最近、宮田氏自らがプロデュースしている若手クリエーターたちによる、CADで設計して漆を塗った陶器が、老舗割烹の主人の目に留まりコラボレーションが生じたそうである。

「金沢にはごく身近に、すばらしい職人さんがいる。彼ら若きクリエーターたちが器を製作する際も、世界的にも活躍されている料理人さんに意見をいただきながら作品に反映できた。その上、完成した斬新なデザインの器の加工を伝統ある金沢漆器の職人さんが引き受ける、という展開もスムーズに進みました。いろいろなコラボレーションがしやすい街なんです」

雪花の代表取締役の上町達也氏（右）は岐阜、取締役の柳井友一氏（左）は島根の出身。ともに金沢美術工芸大学を卒業後に東京の有名企業に就職したが、第二の故郷である金沢に戻ってきた。

老舗の技と最新技術。伝統と前衛が、ここでもまたリンクする。

宮田氏に倣い、デザイン、広告関連で移住する会社が徐々に増えているものの、問題や課題はある。その一つが、金融機関がベンチャーへの融資に対してとても慎重なことだ。

「そのかわり金沢には、まだまだ旦那衆がいます。欧米でいう、エンジェル投資家みたいなものですね。ただ、目ききである旦那衆の皆さんは、事業計画ではなく人を見る。こいつが本当にやり切れるのか……茶の湯の器と同じです。見た瞬間に判断する。ある意味では、金融機関よりも恐いですね（笑）」

新たな取り組みが人の心をつないでいく

伝統の中から、次々と新たな創

地域の底力――金沢市

金沢市長山野之義氏が力を注ぐ取り組みのひとつが、建築文化の発信。谷口吉生氏による「鈴木大拙館」、黒川紀章氏設計のホールや隈研吾氏が手がけた保育園など、「間違いなく金沢の文化の付加価値になる」という。

造が生まれていく。そんななか、行政サイドは現在、どのような取り組みを行っているのだろうか。二〇一〇年から市長を務める、山野之義氏にお話を伺った。

今回の北陸新幹線開通にあたり、山野氏が第一に追求したことは、金沢らしい景観を守ることだという。

「新幹線の窓から見える景色を、できるだけ統一感のある金沢らしい落ちついたものにしていこう、という規制をかけています。限られた範囲ですが、呼びかけにより、その地域外でも同じような意識を持ってもらえるのではないかと」

広告に関しても例外なしの条例だが、企業からの反発は別段なかったそうだ。一九六八年に日本初の景観に関する「金沢市伝統環境保存条例」を制定して以降、金沢は多数の条例を掲げ、歴史的かつ文化的な景観を保護するだけでなく復活もさせてきた。

「長年の取り組みが幸いして、市民のなかに文化的な景観を維持していくという意識が少しずつ積み重なっているようです」

新たに金沢で展開する企業にも、工場のような建物は金沢駅の西側にあたる港湾地区へ進出するよう理解を求めている。

「それでも進出する価値があると思っていただけるように、街全体のグレード、ブランド力を高めていくことが大切だと思っています」

街のグレードを上げる。あちらこちらで耳にした言葉が、山野氏からもこぼれた。この地に暮らす人々の一貫した姿勢には、ぶれがない。おそらくこれこそが、金沢らしさなのだろう。

「地方都市といえども、常に世界に視座を置いた街づくりをしていかなければいけない」

そう話す山野氏が大きく掲げる目標の一つに「世界の交流拠点都市金沢」がある。その一環として、今年十一月十五日には日本陸連公認の「金沢マラソン２０１５」が開催される。一万二〇〇〇人の参加者を募集しての初の試みだが、姉妹都市のある台湾やベルギーなどにもミッションを送り、選手団を呼び寄せるなど、既に予定参加数以上の応募が国内外からあるそうだ。

スポーツで街を元気にしたいという公約を果たす施策だが、それ以上に思わぬ効果があったと山野氏は笑顔を見せる。

「町内会の組織率がまだまだ高いとはいえ、昔に比べて減少しています。先々、金沢の共助の精神が薄れていくことが危惧される中、大会をサポートするべく町内会や地域公民館、青年会議所など多くの方がボランティア登録をしてくださいました。さらに登録された方々が、打ち合わせを重ねるなかで、あらためて街の人々のコミュニティーの再構築、醸成がなされているようなんです」

マラソンの様子を思い描きながら、感慨深く思う。伝統と革新が不思議にもやわらかく溶けあった景色のなかを、さまざまな人が自分のペースで走る。その裏舞台を、市民のおもてなしの心が支える。それは金沢が四〇〇年にわたりたどってきた道そのものではないだろうか。

「伝統を後生大事に守るのではなく、常に刺激を与える。時には違うだろうと言われるかもしれませんが、新しいものに挑戦する。それをやり続けていかないと、金沢は金沢でなくなってしまう。文化が廃れてしまうと思うんです」

マラソンにはゴールがあるが、街の未来は永遠に続く。金沢は、さらに走り続ける。

2011年開館の市立「金沢海みらい図書館」は、新たな建築文化の一つ。日本建築学会作品選奨となった。儒学者 新井白石に「加賀は天下の書府なり」と言わしめた金沢の未来を指し示す知の館。（写真提供：金沢海みらい図書館）